
灰の龍は退屈が嫌い

白色野菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰の龍は退屈が嫌い

【Nコード】

N2659Y

【作者名】

白色野菜

【あらすじ】

死んだ女性が龍に転生させられたあげく、神様にとある使命を押し付けられ、しぶしぶ生きてくだけのお話

ブログ？（前書き）

駄文注意

誤字脱字感想は全力で受付中

プロローグ？

むかしむかし

世界がまだ、有限であつた頃のお話

あるところに、一匹の龍が居ました

龍はとても気高く、孤独を好みました

高い高い山に住んで、人々を長い間見守っていました

ある日、その龍のもとに勇者が現れます

龍は勇者の清き心に触れその優しさを認め

力を貸すため勇者と共に魔王を倒す旅に出ます

長い旅の果てに、とうとう勇者は魔王を倒すことが出来ました

龍はその終わりを見届けると、満足げに笑みを浮かべ

その、巨体を横たえました

龍は、勇者を庇い魔王の最後の呪いを受けていたのです

龍はどんどん弱っていきます

勇者が必死に命を繋ぎ止めようと、手を尽くしますが

龍は穏やかに命を終えました

勇者は龍の形見にと、龍の亡骸から鱗を3枚取りました

すると、なんということでしょう

鱗は光輝き、それぞれとても美しい女性の姿となりました

勇者は彼女たちを連れて、故郷へ帰ります

故郷は勇者が帰ってきたことに驚き

英雄の帰還にとっても喜びました

そして、勇者が連れて帰った女性たちを
龍の巫女と呼び、丁重に歓迎しました

それから、勇者は小さな国を作りました

王妃は勿論、龍の巫女達です

そして、勇者達はその国で末永く幸せに暮らしましたとき

プロローグ？

私は死んだ

過程は大した意味を持たないので、語るのは止めよう

私の体は、火葬され骨と灰になった

私の魂は、浄化のため業火に焼かれた

残ったのは

転生できる真っ白な魂と、燃え落ちた記憶の灰

どちらも私という自我を形成するのに重要で

それらが二つに分かれたなら、私という人間は終わるはずだった

白い魂は、新しい輪廻へと旅立ち

黒い灰は、世界の肥やしとなるため混沌へとまかれた

私の灰は世界と混ざり、ほんの少しだけ世界を変容させた

その、変容が、まずかったらしい

その歪は、とても小さいが人がもたらした物である為、神々は排除できない

その歪は、世界が科学しか持たない為、人々は排除できない

その歪は、周りの灰を飲み込み一つの現象と理を世界へ持ち込んだ

それは、いずれ『魔法』へといたる理だそうだ

それは、遠い未来『神』を生み出す種だそうだ

それは、神々にとって驚愕に値し

それは、神々が私へ興味を向けるのに十分な理由だった

灰は混沌から取り出され、白い魂に降りかけられる

私という自我は何度かの輪廻の後、復活することとなった

そして、神々は私を前に一つの相談をし、私の許可なく一つのことを決めた

私はどうやら、これから死ぬために生き返らないといけないらしい

落下

頑張ってこいと放り出された

空に

かなりの早さで落ちているのか
自分の体が空気を切る音が酷く五月蠅い

うつ伏せの状態で落ちているので地上が見える
まだ、衝突まで余裕は有りそうだ

周囲が暗いので、恐らく今は夜なんだろう
視界には村らしき灯りの束は見えない
科学がなく魔法がある、とは聞いていたが
あまり一般的では無いのか
それとも今が誰もが寝静まる時間なのか

いくつかの雲を突き抜け、地上も大分近づいた
体を動かして、簡単にこびりついた霜を落とす

それから、深呼吸

人間にはない、器官を動かさないといけない
記憶が邪魔をしないことを祈りつつ

大きな背中の羽を広げる

瞬間、翼が風を受け止め大きなブレーキがかかる
エレベーターが停止する際の圧縮感を全身に感じ
一先ずの成功を認識した

とはいえ、まだ翼を広げたただけだと落下が緩やかになるだけだ
きりもみ状態にならないところを見ると
ある程度は本能で補佐をしているらしい

それならば、と

翼で空気を抱え込み、地上に向かって押し出してみる
イメージは水泳のバタフライより

一度押し出しただけで、一瞬体が重力から解放され
また、落下が始まる

勢いがつく前にもう一度押し出すと、簡単に落下は上昇に変わる

それから何回か羽ばたいて、高度を確保した
さて、何処に行くか

この姿で、人里がある可能性のある平地に降りるわけにはいかない
森も、自分の姿が隠れきるような木々は少ないだろう
となると、海か山

……山にしよう

視界を巡らせればとても大きそうな山が見える
予測なのは、山までの距離感が掴めないからだ

夜が開ける前にたどり着けることを祈り
今度はクロールのイメージで空気を後方に押し出す
すると、翼が風を受け滑空する形になる
これなら時たま羽ばただけですみそうだ
速さもかなりの物なので

心配していたような事態には、ならないだろう

取りあえずの目処がたてば、飛行を楽しむ余裕も出てくる
翼を羽ばたく度に風を切る感触は心地いいし
景色も単調ではあるが、中々見れないものではある

何時かアクロバット飛行に挑戦してみるのも悪くないと思いつつ
私は一時間の夜の散歩を存分に楽しんだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2659y/>

灰の龍は退屈が嫌い

2011年11月6日10時10分発行